

第4部会

であるとされる。

次に、坐って頭を胸につけるように丸め込むことに関しては、聖書と擬ディオニシオス・アレオパギテースにその典拠が求められている。パラマスは、エリヤが「頭」を両膝に「もたせ掛けた」と記されている聖書の記述（王上十八・四十一）を持ち出し、ヘーシユカストの祈りの姿勢の範型とするが、その際、この姿勢をとることでエリヤは「神的なものに耳を傾けさせる」ことができた、と解釈される。また、祈るさいに視線を自身に向けるヘーシユカストたちは、「両目を天に上げようとせず、胸を打ちながら『神様、罪人の私を憐れんでください。』と祈り、義とされた徴税人（ルカ十八・九―十四）を目標している」のだ、との主張が展開される。

さらにパラマスは擬ディオニシオス『神名論』第四章八、九節における「ヌースの円環運動」の概念を援用し、「これを通じてヌースは自分自身をも越えて時に神と一緒になる」(Triades 一一―一五「八五頁、一一―一四行」と述べる。

神へと「登攀する」道行きが「内へ」の動きになっていること、すなわち、「上へ」の運動が「内へ」の運動に重ねられていること、そして自らの内で神と一つになるという発想には、マイスター・エックハルトや十字架のヨハネとの類似性も見出すことができる。

そもそも身体的姿勢によってヌースという非質料的なもの（より純粹で霊的なもの）に影響を与えうると考えられたのはなぜか。祈りや観想——そしてその果てに期待される人間の神化——に身体が与えることができるのとされたのはなぜなのか。そ

こには人間身体、ひいては人間に対するパラマスの肯定的なまなざしがある。パラマスにとって、そもそも身体は悪しきものではない。制御しがたい諸々の悪しき欲望が確かに人間には存在するが、しかしそれは身体そのものではなく、身体を動かすところの情念に起因するのである。そしてなにより、ヘーシユカスム論争においてパラマスが決して譲ることがなかったのは、霊的（非質料的）なものと身体的（質料的）なものとの、神と人間とのつながりがあるのだ、という主張だった。パラマスにとってヘーシユカストとは、「身体的な諸々の割符（シンボル）を通じて、ヌースにかかわるもの、神的なもの、霊的なものを刻印し、呼びかけ、迎える人々（Triades 一一―二十一「九七頁、一三一―一五行」）なのである。

野宿者の入信動機

——救世軍の事例から——

白波瀬 達也

釜ヶ崎およびその周辺部では、野宿者問題が深刻化した一九九〇年代後半から、キリスト教への入信を重視するプロテスタント教会による「ホームレス伝道」が活発に行われている。本発表で取り上げる救世軍西成小隊は一九九九年に食事や衣服の提供を伴ったホームレス伝道を積極的に着手し始め、十一年が経過した今日、毎週約八〇人の野宿者が礼拝に参加するようになった。しかし、彼らの教会への関わり方は一枚岩ではなく、

様々なパターンが存在する。具体的には、「教会が提供する物質的サービスを道具的に利用し、信仰を内面化しない非信者」、「信仰をある程度内面化するが、教会へのコミットメントを避ける周辺の信者」、「信仰を内面化し、教会にコミットメントをもつ信者」に類別することができる。教会への関わりに差異が生じるのはなぜか。本発表では五年以上にわたる西成小隊の参与観察記録とボランティア・スタッフとして関与している(元)野宿者への聞き取りを通じて、上記の問いを明らかにする。

多くの野宿者が継続的に礼拝に参加するなかで、入信の有無が分かれる主要因は「下降移動の程度」である。長期間、日雇労働に従事してきた「典型的な野宿者」は、野宿生活を近い将来起こりうるものとして想定していたり、過去に経験していたりすることが少なくない。彼らは下降移動の程度が比較的緩やかであることから、野宿化するなかで生じる葛藤状況がさほど深刻ではなく、救済期待が顕在化しにくい。したがって、彼らは「生きぬき戦略」として教会が差し出すサービスを単に道具的に利用するにとどまり、入信には至ることは少ない。一方、激しい下降移動を経験した「非典型的な野宿者」も「典型的な野宿者」と同様、当初においては「生きぬき戦略」として教会のサービスを道具的に利用する。しかし、現状に対する不満を強くもつ者もあり、葛藤状況を逡巡するべく、新たな意味体系を受容し、入信することがしばしばある。西成小隊ではホームレス伝道を開始した一九九九年から二〇〇九年までの十一年間に一〇〇人以上の野宿者が入信している。そのなかで継続的に教会に所属したケースは四〇人ほどで、今日、積極的に教会活

動に参加しているボランティア・スタッフは一〇人ほどにとどまる。

このように入信をしても教会への所属が持続する者は多くない。所属の有無が分かれる主要因は「親密圏の要否」である。教会は個々人の内面に積極的に介入する「関与規範」をもっている。それは、釜ヶ崎で広くみられる関係規範とは大きく異なる。社会学者の青木秀男や西澤晃彦が指摘している通り、流動的な匿名社会である寄せ場では、互いの出自や経歴を問わず、自らの過去を隠匿する傾向がある。日雇労働の経験が長い「典型的な野宿者」の多くは、このような「不関与規範」を内面化していることから、仮に教会にシンパシーをもって入信したとしても、「関与規範」が強くはたらく教会に所属することには抵抗感を示す。一方、過去に比較的安定した社会関係を有していた野宿者は教会の「関与規範」を好意的に受け止め、教会に帰属する傾向がある。

「民衆」概念による

近世フランス神秘主義へのアプローチ

渡辺 優

近世西欧キリスト教世界において、神秘主義は、そもその起源から異質な宗教的学知とのあいだの緊張関係に置かれていた。神秘家たちは、自己の体験の特異性を強調し、神秘主義に